



ツイッター小説

201009 春昼

「MDMA いませんか？」熱帯夜の路上で、MDMA売りの少女が問いかけても、「警察に通報するぞ」などと脅されてしまいます。少女はかけ声を変えてみました。「アミノ酸いませんか？」振り向いてくれた通行人を路地裏につれこんで、MDMAを売ります。結構な金になりました。

押尾学事件の後MDMAが売れなくなって、MDMA売りの少女は栄養失調気味になりました。猛暑の夜、路上に倒れこんだ少女は、売り物のMDMAを自分の体に注射してみました。亡くなったお婆ちゃんの顔が、ぼんやり脳内に浮かんできます。MDMA売りの少女はそのまま死にました。

アメリカ大統領、日本の総理大臣、中国国家主席が、世界No.1の実力を持つというSMの女王様の前に正座させられた。「女王様とお呼び！」3人の体を鞭が襲う。破れたスーツから血が溢れる。「許して下さい」「おだまり、薄汚い卵たちめ」女王様は3人をハイヒールで蹴飛ばした。

数ヶ月前、小学生の女の子が自殺したというニュースが流れましたが、今日は幼稚園児の女の子が自殺しました。園内でのいじめをほのめかす絵が、遺留品の落書き帖に見つかったそうです。一週間以内に、幼稚園入園前の3歳児が、親への不満から自殺すると予測されています。

数日前、麻薬不法所持のお笑い芸人が逮捕されていた。昨日は大阪地検特捜部検事が証拠隠滅容疑で逮捕された。今日は、最高裁の裁判官と、総理大臣と、警視庁総監、広域暴力団組長、大企業社長まで不祥事発覚で逮捕された。そして誰もいなくなった。

ピッチャーが魔球を放った。魔球はバットをぶち破り、キャッチャーの体を貫通し、スタンドの壁まで破壊して屋外に突き抜けた。魔球の速度は衰えない。国境を越え、太平洋を横断し、市民、政治家、軍人、正義の味方の体も突き抜け、多数の命を奪った魔球は、今も地球を周っている。

地球の海が真っ白になった。海水が全て精子になったかのようだ。白い海の上空に裸の女性が横たわっている。僕は彼女の体にナイフの先端をあてた。彼女の赤い血が、白濁した海に落ちる。赤く染まった海から、巨大な赤ちゃんが顔を出した。赤ちゃんが口を開いて叫ぶ。言葉は聞こえない。

東京上空で輝く太陽が、2つに割れた。太陽の中から、胎児が出てきた。胎児はゆっくりと地表に向けて落下してくる。赤く輝く胎児の体から、腕がもげる、小さな足が分離する。五体ばらばらになりながら、太陽から生まれた胎児の巨体が落下する。赤ん坊の頭は、原子力発電所を破壊した。

裸の女性がベッドの上に仰向けで寝ている。鉄筋コンクリート剥き出しの部屋に家具はない。僕と、ベッドと、全裸で黒髪の女性だけ。白いシーツに赤い血の染みが広がる。彼女の背中から出血しているのだろうか。シーツから溢れた血がコンクリートの床に滴り落ちた瞬間、彼女は自爆した。

「僕の仕事は、背中に大剣が刺さっている人を探して、背中の剣を抜き取ることです」「剣が刺さっている人なんて、見たことないですよ。それじゃ生計たてられないでしょう」「あなたの背中にも刺さっていますよ、どす黒い大剣が」

私の仕事は、背中に大剣が刺さっている人たちの治療を行うことです。腰や肩に突き刺さっている黒光りする剣に両手を添えて、剣を抜き取ります。施術中に血は出ません。麻酔も不要です。ただ患者さんたちはみな、施術中に泣き崩れるのです。

私は、小学校の教師をしています。私のクラスの生徒は、全員一つ目小僧です。目が一つしかなくても、授業に支障はありません。二つ目があるクラスとの成績にも差はありません。ただ一つ目の子どもたちは、教室の外で毎日いじめられています。みんな二つ目だからでしょうか。

子どもたちが、海に溺れ死んでいく。浜辺に立つ誰も助けに向かおうとしない。僕も大人たちの間に立ち、子どもたちが溺れ死ぬ様子を眺めている。もがいている子の中に、僕の娘もいる。誰も助けに行かない。微笑みを浮かべている老人もいる。泣き叫ぶ声が、波の音に混じって浜に響いた。

若い女性が泣いている。彼女はもう3日以上前から涙を流し続けている。彼女の足元には赤ちゃんの体がある。赤ちゃんは3日前から泣いていないし、動いてもいない。亡くなったのだろうか。彼女から溢れる涙で、赤ちゃんが水びたしになっている。彼女は干からびるまで、泣くのだろうか。

「結婚しよう」彼は目の辺りに指を突き刺し、右眼を取り出した。「ありがとう」私も自分の顔に指を突き刺し、右の眼球を抜き取った。痛みをこらえながら、血にまみれている眼球を交換する。彼の眼球を私の顔にはめ込む。「婚約期間は見えないよ。結婚したら見えるようになるって噂だ」

「もう別れましょう」そう切り出した彼女が、自分の腹に手を突っ込んだ。彼女の腹から血が溢れ出す。彼女は腹の中から、僕との間に生まれた胎児を取り出した。いや、胎児はまだ生まれてない。生まれる前に取り出されてしまった。

自分の腹から掴み出した胎児を、彼女はフローリングの床においた。胎児は血で覆われている。彼女の腹からは内臓が飛び出している。「もう会わない方がいいよね」僕は胎児を見つめた。子どもの名前を小説にしようと決めていたが、小説の誕生は見果てぬ夢になった。断片だけが残った。

ホールに1万個以上の試験管が並んでいる。試験管の中には、高収入の男たちから採取された精子が入っている。「奥様、好きなものをお選び下さい。ブレンドもできますよ」夫に内緒でここにやってきた。夫の子どもだと偽って、優秀な遺伝子の子どもを育てる。ささやかな反抗の楽しみ。

マジックミラーの向こうに千人近い水着姿の女性が並んでいる。「お客様、どの娘がお好みですか？」妻に内緒でこの店にやってきた。よりどりみどり。子作りのためのセックスにも飽きてきた。この店で遊んだ後、精子を試験管に採取されるというのが、構わない。低価格の代償だ。楽しもう。

試験管に入った優秀な精子を体内に貰い受けた後、外の通りに出た。夫と出会った。気まずい。夫には、別の男の精子を受胎したなんて言えない。けれど、夫も恥ずかしげな様子だった。

風俗嬢から性サービスを受けた後、精子を試験管の中に入れてきた。店を出る。通りで妻に出会った。慌てて、真面目な顔を取り繕う。妻に悪いことをした。自責の念が僕を襲う。しかし、妻の方も何だか気まずそうだ。二人であまり話もしないで、マンションに帰った。

「あなたはだんだん眠くなる」催眠術師の女が僕の目の前でペンダントを揺らしている。僕は両手両足をパイプ椅子に縛り付けられ、身動きが取れない。「さあ、真実を語りなさい」ペンダントが揺れる。僕は真実を語ってしまいそうになるのをこらえる。惑わされるな。嘘を話し続けよう。

二十世紀、小説技法に関する様々な実験、反省、革新があったというのに、今でも十九世紀に主流だった手法で、小説が書かれ、読まれ続けている。いわば小説は、伝統芸能になったわけだ。せめてここでは、伝統芸能ではない小説を書こう。

私は今日生まれた。私に名前はない。私は名古屋の駅構内で暴れて、おばあちゃんを殺してはいませんが、ツイッター内で暴れて、伝統芸能化した既成の小説を殺しています。

小説と音楽の関係。19世紀のリアリズム小説は、クラシック。20世紀の前衛小説は現代音楽。ビートルズはロック。20世紀後半のベストセラー小説はポップミュージック。21世紀の小説もポップミュージック。ポップとは、モダンであり、モードであること。多くの人を触発すること。

「僕の仕事は、小説を叩くことです」「叩く？ 批判するってことですか？」「いえ、小説を生産してるんです」「小説を書いているってことですね」「書いているんじゃない。叩いてるんです、徹底的に。何度も何度も叩いて、傷だらけにしています」

「僕の職業は、小説の叩き売り屋です」「売れない小説を安売りされてるんですか?」「違います。小説を書いているんです」「だったら小説家とか、作家とか、物書きとか、文屋と言ったらいいのに」「キーボードを叩いてできたものを売るんだから、僕の仕事は、小説の叩き売りです」

小説は友達。絶対離さないで。絶対話さずに書き続けて。小説は友達。怖くない。小説は友達だと教えてくれたのは、翼の折れた人間だった。大丈夫。小説は友達。裏切らないよ。

本当にあったことを書き留める技術と、書いてあることを本当のことだと思わせる技術は、全く異なる。リアリズムとは錯覚である。

小説家になれないから、ツイッターで小説を書いている人。「もうひとつの世界は可能だ」事実の解釈を変えてみよう。ホワイトカラーの概念創出型労働をしながら、ツイッターで小説を書いているマルチチュード。解釈を変えただけでも別の主体に変化する。もうひとつの世界は可能だった。

「ブログのテーマが多岐に渡り、何をやりたいブログかわからなくなってきました。ブログの作者自身の人生も、色々な事に手を出しすぎなんじゃないですか」「人生の多様さを全て記録できるほど情報技術が発達した結果です。背骨を作りたくもない。未発見の領域に走り続けるだけです」

「無料の電子書籍はダウンロードされているけど、百円に設定した電子書籍はダウンロード0件だ」
「電子情報で利益を得ようという発想が20世紀的だ。無料の電子情報を生産して、かつ経済的自由を確保するためには、社会福祉を変えるか、書籍の情報によって、読者を変える必要がある」

2500年前、ブッダは「ただ一人犀の角のように歩みなさい」と言ったという。「ただ一人犀の角ようにつぶやきなさい」と、今ならツイートできる。そのツイートはボタンを押した瞬間、世界に向けて発信される。技術の可能性にみんなで賭けてみよう。

2000年前、イエスは「汝自身を愛するように、汝の隣人を愛しなさい」と言ったという。「汝自身がフォローされているように、汝の隣人をフォローしなさい」と、今ならツイートできる。愛と清貧。みんなで支えあうこと。ツイッターのようなウェブの技術革新は、連帯を加速する。

「ただ一人犀の角のように歩みなさい」と「汝自身を愛するように汝の隣人を愛みなさい」を
ツイッター上でミックスしてみよう。「ただ一人犀の角ようにつぶやきつつ、汝の隣人をフォロー
しなさい」というツイッター時代の言葉が生まれた。つぶやきあうことで、世界を支えよう。

犀の角ようにつぶやいているだけで、心に落ち着きが生まれる。書くことが、書いた思考の永遠化を目指しているとしたら、つぶやくことは、つぶやいた言葉が、同時代の集合知とつながる至福を目指している。言葉が永続化しなくてもいい、つながりの痕跡を意識化できるならば。

こうしてただ一人犀の角のようにつぶやいている間にも、他の誰かのツイートが生まれている。24時間誰かがつぶやき続けている。よく考えれば、当たり前なことだ、これだけ人が地球上に溢れているのだから。一人犀の角のように歩んでいるのは、ブッダだけではなかった。

すばらしい本に出会うと、人生が変わったような気分になる。本は今ある場所から別の世界、価値観に連れ出してくれる。ここで言う「本」は、今なら「情報」と言い換えられる。本は媒体に過ぎない。人生を変容させるのは情報の方だ。情報は食品からも会話からもネットからも入ってくる。

「ツイッターはオナニーではないと思う。つぶやいている間、巨大な集合知とつながっている感覚がある。一人きりの孤独感はない。今までにない体験だ」「ツイッター中のユーザー体験を模倣した性サービスが、今後開発されるということだな」「オナニーでもセックスでもない第三の性だ」

TVゲームは結局今日やらなかった。ネットで書いている方が楽しかったから。人生はゲームだとしたらツイッターは優れたミニゲーム。ニコニコ生放送に首相候補が出演したと知ってびっくり。テレビは視聴率という形でしか参加できないけど、ニコニコ生放送なら書きこみで参加できる。

そろそろ眠ります、じゃなくて長めの小説を書き始めます。長めといっても、原稿用紙50枚の短編。ツイッター小説なら、原稿用紙50枚に142編の超短編を組み込むことができる。50枚の用紙が、何と広大に思えることだろう。世界の尺度はツイッターで変わった。万物がツイートする。

ツイッター小説を書くのは、生け花や盆栽をやるのと同じように、ボケ防止に有効だと思う。指を動かす。140文字の制限内で、完成像を考えながら小説を書く。できた小説をすぐさま世界中に向けて発表する。脳にいい。ツイッターを続けていくだけでも、無縁社会の孤独は安らぐだろう。

老い先短い一人暮らし。何もすることがない土曜日の夕方、テレビもつけずに過ごしていると、寂しさと孤独感で自殺したくなる。テレビをつけて賑やかさを部屋に招き入れれば、無縁社会の孤独が和らぐ。ツイッターも人と人のつながりを意識させてくれる。多くの友人が亡くなったけれど。

テレビに出てくる芸能人と視聴者である私につながりはない。街を歩いてすれ違う人ともつながりはない。ツイッターも、一つ一つのつぶやきは独立している。けれどテレビ、街歩き、ツイッターは、私の生が、生きている人たちと共にあることを思い出させてくれる。地下室からのつぶやき。

「今最も解決すべき問題は何ですか？」「健康と衣食住が保障されていない人が世界中にたくさんいること。衣食住が満ち足りているのに、尊厳と幸福を感じていない人が、世界中にさらにたくさんいること」「全てを疑え」

「アウシュヴィッツの後に詩を書くことは野蛮である」とアドルノは書いた。「イラク戦争の後に正義を振りかざすことは暴力である」と私はつぶやいてみた。正義を振りかざすことが暴力だとしても、来るべき正義の可能性について、思考するのを諦めないこと。

与党党首選を前に公開討論のテレビ中継。「こんなのやってる場合じゃないんだけどな」と失業と不況みれの社会の人々がつぶやく。この乖離は、世界と日本の間にもある。飢餓と紛争に苦しむ国の人々が、日本の平和な光景を見たとする。「こんなことやってる場合じゃない」怒りは当然だ。

殺害事件が起きる。加害者は女と大和言葉で言われ、被害者は女性と漢字で表現される。報道は、被害者の女性を理解可能な存在として価値づけつつ、加害者の女を理解不能な精神異常者として排除する。加害者の女とは、社会的に構築された女性なのだ。

働くよう母親に注意されて、キレた息子が母親を刺殺したという。このニュースの見出しだけを見ると、センセーショナルで、理解不能な異常事態だと思える。違う。ニュースの書き手が扇動的な演出をしているだけだ。事件の背景には、不満の積み重ねと、世界不況と、家族の孤立化がある。

イラクで実際にあった話。「アメリカ兵が、横断歩道を渡ってもいいと妻に言った。妻が横断歩道を渡った。遠くにいた別のアメリカ兵が妻に銃弾を浴びせた。妻は命を失った。アメリカ兵は横断歩道を渡っても大丈夫だと言ったのに」さて、このアメリカ兵に殺人罪が適用されるだろうか。

うっかりミスで、アメリカの兵士がイラク人を銃殺する。それは極限状況でよくありがちの、些細なミスだろうか。上官に怒られて終わりだろうか。日本で、うっかりミスで銃殺されたりしたら、大変な社会問題になる。バグダッドではそれが日常だ。

明日発売される戦場を舞台としたゲームでは、戦場で兵士として行動するだけでなく、医師や平和活動家として行動することもできるという。よりたくさんの人々の命を助けることがゲームの目的となる。殺し合いを楽しむプレイヤーに狙われながらも、架空の命を助ける新しいゲームだ。

「これからの日本は、敬老の日に敬うべき老人の数が増え、子どもの日に喜ぶべき子どもの数が減る逆ピラミッド型の人口構成になる」「移民感謝の日を作って、移民を歓迎したらいいじゃない」「希望のないこの国から出て行く人も増える」「毎日祝日がいいな。全ての行為を歓迎したい」

ニュースを見ず、新聞も読まず、ネットにも接続せずに島国で暮らしたら、毎日平和で気楽で幸せだろう。ある日突然、安全保障が切り裂かれぬ限りは。それは突然剥き出しで迫ってくる。破り、強引に押し込み、掻き乱してくる。不意の侵入をも歓待し、贈与として受け取れるだろうか。

「連日熱帯夜で眠れないからといって、夜エアコンをつけっ放しにして眠るのは、ヒートアイランド現象を加速させることになるとわかっているはずなのに、何故かみんなでやってしまう。生活観を変えない限り、ヒートアイランドは終わらない」と書いている今もエアコンを使っている。

直感的でわかりやすく、説明書不要のインターフェイスが人気だ。ユーザー側は、機械を触っているだけで楽しい。操作するだけで、生理的快感が生じるように、機器が設計されている。ユーザーは思考しなくなる。小難しい知識、論理的推論能力が不要になる。

ユーザー側の肉体的快感が増大する一方、設計者側にはますます論理的思考能力が求められるようになる。機器についての知識がないユーザーでも、直感的に操作できるよう機器を設計するには、普通に設計するよりも工夫と設計力が必要になる。

知識、技術力、収入格差の拡大は、現在進行中だ。ユーザーはどんどん知力不要になり、設計者側はどんどん知力が必要になる。便利で気持ちいい設計をするGoogleやAppleには、高学歴の知的労働者たちが集まる。彼らの収入はどんどん増える。知識も集まる。

直感的でわかりやすく、操作するだけで生理的快感を生産する機器を使っているだけでは、どんどん下層に追いやられる。知識不要で操作できる機器を作る側に回らない限り、社会での上昇は望めない。現在の時代状況で、小説を書くことは徹底的に無力な行為ではないか。だとしても書こう。

紛争の土地で平和構築の仕事をしている人と、東京でパンを作っている人の間に、人間としての貴賤の差はない。どちらも世界にとって必要な、とても重要な仕事。彼らの働きがなければ、世界は回らないんだ。小説家も同じ。どんな職業からも、尊厳を引き出すことができる。隣人に尊厳を。

自分が持っていない資質よりも、既に持っている資質に目を向けること。そうすれば、不安も渴望も浪費も恐怖もなくなる。たくさん持っていることを忘れていただけだ。欲していたものは全て、手の中にあった。

僕は1億円で売られた。高いだろうか？ 時給1200円で毎日8時間、年に250日42年間働いたとしたら、稼ぎは100,800,000円だ。「人間は誰しも1億円以上の価値がある。人によっては何倍にもなる。今日はいい買い物だった」奴隷商人が笑った。僕は価値を知った。

自分の人生を作品にすることができる。自分が望むように、人生を形作ることができる。理想の形を再現することは不可能だろうが、毎日何を食べて、何を見て、聞いて、話すのか、考えながら生活していくことはできる。理想に外れる異物を排除するのではなく、他者を寛容の精神で迎えよう。

たとえ誰にも評価されず、誰に愛されることもなく、誰に食べられることがないとしても、パンを作り続けましょう。パンとは、食べるために作られるものではないですから。

誰に愛されてもいないと思っているのは、あなたの誤解かもしれません。

お休みなさい、全ての疲れている人達。疲弊した今日伝えたかったのは、ただそれだけの言葉。

どういう生活を成したら、人生が快適になるのか知っているのに、自分自身実践していない。人とも知識を分け合うことがない。毎日繰り返しているのは、こんなことをしたら駄目だと思っていることばかり。そう思ってから、胎児はもがき続けた。這って這って這い回る。泥の中を。

24時間研ぎ澄まされた状態で生きること。自己を保つこと。欲望に屈しないこと。欲望を型にはめないこと。欲望を自分の望む通りに発展させること。普通という言葉は嫌いだ。常識という言葉も嫌いだ。意識を奪われる時間はもう終わりだ。無意識だけが世界を破壊する。

「僕はもう競争することに意味を見出せなくなりました」

「やりたいことをやればいい。君のしたいことが競争じゃないとしたら、何？」

お爺ちゃんが喋り出す。「7代後の孫への話を聞かせてあげよう」「そんな未来に誰も生きてないじゃない」「長期的スパンで考えてみるんだ。7代後の孫のために現在を生きてもみよう」「耄碌したかくそじじい」「刹那的な満足は7代後の世界を傷つける場合もある」「未来なんて見えない」

僕が毎日飲んでいる牛乳。牛乳と言われると安い商品みたく思えるけれど、実は、母親牛の胸から搾り取られた乳だ。僕は、子牛の代わりに、母の乳を頂いている。コンビニに何本も並んでいるあの牛乳は、子牛のためのものではなかつたらうかと想像してみよう。

「人が死ぬと供養される。ペットが死んでも供養される。牛丼やハンバーガーを食べても供養しない。不思議だ。毎日供養する必要があるんじゃないか」これは愚かな思いつきだろうか。人前で異常者と見られるのが怖くて供養できないとしても、頂きますとか、ご馳走様ですと、伝えられる。

「お金よりもっと大切なものの為に仕事をしてみよう」「それじゃ儲からないでしょ」「その大切なものは、いくらお金を出しても買えないし、お金以上の価値を生み出す」「貴方にとってそれは何?」「牛乳だ」「178円で買えるよ」「偽物の価格だよ。牛乳は子牛が飲むべき恵みだよ」

「1日1分でいいから、祈る時間を持つこと。いくら忙しくたって、24時間のうち1分くらいは祈る時間を持つことができる」「誰のために?」「誰のためでもない。君が飲み食いした動物と植物の命に対して、感謝の祈りを捧げるんだ」「バカか?」「誰よりも馬鹿でいい。1分をくれ」

寛容の精神を育むために、カフェオレを飲む。牛の母乳の恵みに、コーヒー豆の恵みを加える。悪くない習慣だ。何も感じずに飲めば、消費になる。恵みだと思えば、食事になる。

犬を飼っている家に行くと、食事中犬がつぶらな瞳で迫ってくる。飼い主の友人たちは、「食べさせたら駄目だ。体によくないから」という。ペットが食べたら有害な食事を、何故人間の僕らが食べているのだろう。人間の消化能力をもってしても、食卓に並ぶ食品は有害かもしれない。

コンビニに行くと、いつも牛乳が3種類くらい並んでいる。毎日毎日、牛乳が欠けることはない。一体どれくらいの牛の乳が搾られているんだろうか。僕の近所のコンビニだけじゃない。日本中のコンビニに搾り取られた牛の乳が並んでいる。僕たちは、子牛の代わりに母乳を飲む人間だ。

僕に母親の乳を飲んだ記憶はない。けれど、牛の乳を飲んだ記憶はたくさんある。牛乳は商品として当たり前存在しているから、いつでも飲める。カフェラテにも乳が入っている。牛乳を出してくれた母牛の姿を見たことはない。僕が権利を奪った子牛の姿も見たことはない。変な話だ。

雨があがった後、空から赤ん坊が何万體も降ってきた。僕らの體は、豪雨のように降り注ぐ赤ん坊の體に打たれた。悲鳴が聞こえる。飛び散る血が見える。赤ん坊も、僕らも、死んでいく。そして誰もいなくなった。

雨があがった後、空から卵が降り始めた。鶏の生卵、うずらの卵、受精せずに排卵された女性の無精卵が、私たちの頭上に降り注いだ。月経血にまみれて、卵焼きや目玉焼きまで降ってくる。降り注ぐ卵は全て、命のかけら。私たちは白味と黄味まみれになった。

雨があがった後、乳が降り注いだ。牛乳なのか豆乳なのか母親の母乳なのか、舐めてみないとわからない。母乳の味の記憶を持っている人はほとんどいないから、母乳と粉ミルクの判別がつかなかった。これだけ乳が降ってきたのだ。一体天上にどれほどの牛と人間がいるのだろう。